

TOKYO AIDS WEEKS 2017 実施報告書

背景

日本国内の HIV 陽性者（HIV 検査ですでに陽性と判明した人）は約 2 万 7 千人といわれ、東京都には 7 千人以上、首都圏では 1 万人の HIV 陽性者が暮らしています。かつては、HIV 感染による免疫低下で引き起こされるエイズ発症により、死のイメージが強かった病気でした。現在では画期的な治療が開発され、検査によって早めに診断を受けて治療を開始することで、非感染者と変わらない寿命を生きられるようになってきました。

しかし、今も HIV/AIDS に関する差別や偏見は根強く、HIV 陽性者を苦しめています。また、HIV に感染しているにもかかわらず検査を受けていない感染者も多くいると考えられます。このため、多くの市民に HIV/AIDS の正しい知識を提供するのはもちろんのこと、他人事ではなく自分にも関わりのある問題としてとらえてもらうための取り組みが重要です。

目的

TOKYO AIDS WEEKS 2017 は、HIV/AIDS に関する最新の情報を提供するとともに、そのリアリティを共有できるよう、市民参加型のイベントや展示等を通じて多様な視点からの啓発の機会を設けることを目的として、実施しました。

日時・会場

2017 年 11 月 25 日(土)～26 日(日) 中野区産業振興センター

2017 年 11 月 23 日(木)、24 日(金)、26 日(日) なかの ZERO

主催

TOKYO AIDS WEEKS 2017 実行委員会

〒 169-0075 東京都新宿区高田馬場 4-11-5 三幸ハイツ 403 (ふれいす東京内)

TEL : 03-3361-8964 (月～土 12-19 時)

FAX : 03-3361-8835

E-mail : tokyoaidswEEKS@gmail.com

URL : <http://aidswEEKS.tokyo/>

共催

中野区

協力

中村キース・ヘリング美術館 (キービジュアル提供)

normal screen (映画上映企画・運営)

スポンサー

ヴィーブヘルスケア株式会社

SOCIALIZER×TRUNK(HOTEL)#002

ジューシー！20th Anniversary

来場者数

1676名 ※イベント別の来場者数については、各報告をご覧ください。

TOKYO AIDS WEEKS 2017 実行委員会

代表

山縣真矢（NPO 法人東京レインボープライド）

幹事

生島嗣（NPO 法人ふれいす東京）

加藤力也（NPO 法人ふれいす東京）

岩室紳也（AIDS 文化フォーラム in 横浜／厚木市立病院）

荒木順子（NPO 法人 akta/コミュニティセンターakta）

宮田一雄（NPO 法人 AIDS & Society 研究会議）

HIRAKU（中村キース・ヘリング美術館）

松中権（認定 NPO 法人グッド・エイジング・エールズ）

永野靖（中野 LGBT ネットワークにじいろ）

高野操（国立国際医療研究センター）

中野区保健所

中野区都市政策推進室

事務局

高久陽介（NPO 法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス）

各イベントの実施報告

映画『BPM』 ジャパンプレミア特別試写会

配 給：ファントム・フィルム

日 時：2017年11月23日(木)18:30-21:30

会 場：なかのZERO 小ホール

参加者：200名

TOKYO AIDS WEEKS 2017 のオープニング・イベントとして、2017年の第70回カンヌ国際映画祭グランプリ受賞作『BPM』を、来年3月の日本公開に先立って上映するジャパンプレミア特別試写会を行いました。1990年代初頭、フランス・パリでエイズ患者の権利を求めて闘った「ACT UP」の若き活動家たちを描いた感動作です。

監督・脚本：ロバン・カンピョ／出演：ナウエル・ペレ・ビスカヤー、アーノルド・ヴァロワ、アデル・エネル 他

『Words of Love ～Let's talk about HIV/AIDS～』ライブ&トークセッション

主 催：東京都

日 時：2017年11月24日(金)19:30-21:00

会 場：なかのZERO 小ホール

参加者：100名

東京都が毎年開催しているライブ&トークイベントを、今回はTOKYO AIDS WEEKS 2017のイベントとして実施しました。お笑い芸人のライセンスがMCを担当し、ゲストをまじえたHIV/AIDSや性感染症についてのトークと、アーティストによるライブを行いました。

出演：ライセンス (MC/お笑い芸人)、NO GENERATION GAPS (うじきつよし、佐々木亮介/アーティスト)、蒼井そら、岩室紳也 (ヘルスプロモーション推進センター「オフィスいわむろ」代表、厚木市立病院泌尿器科医師)、今賀はる 他

映画『私はワタシ ～over the rainbow』上映&トーク

主 催：一般社団法人 Get in touch

日 時：2017年11月26日(日)19:00-21:00

会 場：なかのZERO 小ホール

参加者：200名

TOKYO AIDS WEEKS 2017 のクロージング・イベントとして開催しました。痛み、苦悩、ファンタジー、希望…女優・東ちづるがインタビューした40人以上のLGBTs セクシュアル・マイノリティの人たちの言葉をつないだ記録映画。ゲイ雑誌『バディ』『G-men』を創刊し、現在もHIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス理事などで活躍しつつける長谷川博史さんを軸に、漫画『弟の夫』などを手掛ける田亀源五郎さ

ん、タレントのピーターさん、はるな愛さんなどの著名人や活動家たち、生きづらさを感じている人たちのメッセージの数々が心に染みる。

トーク出演：田亀源五郎（漫画家）、東ちづる（女優、一般社団法人 Get in touch 代表）

監督：増田玄樹/企画・プロデューサー：東ちづる

映画『満 23/169/73』上映&トーク

主 催：SWASH

日 時：2017年11月25日(土)10:00-12:00

会 場：中野区産業振興センター 多目的ホール

参加者：57名

SWASH は、セックスワーカーの健康と安全のために活動する、現役/元セックスワーカー当事者とそのサポーターによるグループ。

トランスジェンダーセックスワーカーのセクシュアルヘルスと人権についての、理解と取り組みを促進することを目的として、韓国のセックスワーカー団体「Giant Girls」が2014年に上演した、トランスジェンダーのセックスワーカーの労働プロセスを描いた演劇を映像化した作品『満 23/169/73』（制作 Giant Girls/2014年/韓国/30分）の上映&トークを実施。スペシャルゲストとして「Giant Girls」のメンバー3名が来日した。

映像作品では、主人公のトランスジェンダーのセックスワーカーが仕事においていかに自分を守り、顧客をコントロールするスキルやコミュニケーションをしているかが丁寧に描かれていることから、トークでは、韓国のトランスセックスワーカーの HIV に関する意識や情報アクセスはどうなっているのかという話題からスタートした。

トランス女性のセックスワーカー・ルシアンによると、韓国のトランスジェンダーセックスワーカーの場合、エイズに関しては、お客から「このトランスジェンダーはエイズ」という烙印を押されないように予防をするという感じになっているという。そのため、根本的な予防はされていない。保健所では無料で検査できる。HIV に感染したとしても、薬を飲みコンドームをつければ問題ないが、お客さんはそのことを知らず、また、HIV はゲイが感染するものだと考えている人が多いそうだ（実際のところ異性愛者の感染者が多いそうだが）。

女性セックスワーカーのヨニからは、韓国におけるエイズとセックスワーカーに関する3つの事件が紹介された。1つは、大邱において、海外からきた移住労働の女性セックスワーカーが HIV に感染していたことが遅くにわかったことがあり、この人を出国させてしまった事件。2つ目は、警察の捜査過程において、知的障害のある女性セックスワーカーが HIV に感染していたことがわかり大きく報道された。この人は7年前にも HIV に感染したままコンドームを使わない不安全なセックスワークをしていて警察に捕まったことがあり、韓国の福祉体制の問題に緊密に関係している問題とのことである。3つ目は女子中学生が不安全なセックスワークをしていて HIV に感染した。これらの事件は、韓国はセックスに関する関心は高いが、安全、健康保健のこと等の意識は低いというのが窺える事件だとヨニは述べた。

HIV に関するこうした脆弱な体制の背景のほかに、トランスジェンダーの人々にとっての健康の問題は、生き難さを強いる社会状況にある。MSM 対象業種で働くドギョンによると、ある調査では、トランスジ

エンダーの人々の60%の人がセックスワークをしていることや、トランスジェンダーの多くは学校を途中で追い出されたり、居づらい環境に辞めてしまったりするパターンが多く、そういった人々が次に仕事を見つけるのは難しく、それにより健康維持や治療などが難しくなってくる側面がある。こういった状況の下、トランスジェンダーの人々の健康、勉強、労働の権利は侵害されている。セックスワーカーの問題を考えたとき、女性だけでなく、トランスジェンダーの権利は守られていかなければいけないし、そうすることで社会的／包括的にHIV予防のことに役立つかとドギョンは訴えた。

その他、韓国の警察による店舗型風俗店への暴力的な取り調べ（摘発）の問題も共有され、参加者に強烈な印象を残した。セックスワーカーたちは摘発の証拠を隠すためコンドームを膣の中に隠したり、食べてしまうことがあり、食べてしまったときは警察はワーカーの口を無理やり開けてコンドームを吐かせることもあるという。

会場からも多岐に渡る関心から多くの質問が挙がり、活発なやりとりが行われた。トランスジェンダーの労働の搾取的状況の如何について、学校での生きづらさ、都市と地方の格差、“LGBT運動”の中のセックスワーカー差別、性売買特別法の問題等々。終了後のアンケートでも概ね、「知らないことを知ることができてよかった」等、満足度の高い評価を得ることができた。

朝からのイベントにも関わらず、60名ほどの参加を得ることができ、トランスジェンダーへの関心の高さが窺えた。今回のトーク内容のテキストは、SWASHサイト上に掲載予定で、参加できなかったたくさんの人々にも考える機会としていきたい。

トークゲスト：ルシアン、ドギョン、ヨニ（韓国のセックスワーカー団体 Giant Girls メンバー）

聞き手：畑野とまと（ライター、トランスジェンダー活動家）、宮田りりい（SWASH メンバー）

映画『咲きこぼれる夏』『始まりの駅』上映

主催：normal screen

日時：2017年11月25日(土)13:00-15:00

会場：中野区産業振興センター 多目的ホール

参加者：55名

normal screen は、セクシャルマイノリティの体験や視点にフォーカスした映像上映を中心に、2015年より東京を拠点に活動している。

『咲きこぼれる夏』は、10年前のHIV感染後カミングアウトして積極的に活動するガブリエルと、感染を知り落ち込んでいるドゥヨルとのゲイカップル。対照的な二人の日常を彼らの女友達が捉えたドキュメンタリー。監督：ノ・ウンジ、コ・ユジョン。

『始まりの駅』は、HIV感染の可能性のあるセックスをしてから、暴露後予防を始めた豪州に住む中国人青年ジーヤンの3か月間の不安や苛立ちを描いた中国若手監督による秀作。監督：タオ・ジア。

今回、複数の映画作品の上映に関わったが、本プログラムでは他の上映よりも観客の幅のひろさが目立った。映画ファンに支持される山形国際ドキュメンタリー映画祭で過去に上映されたということで、来てくださった方も多かったのかもしれない。感想には「医療者として初療対応が大事という事を再確認した」「いろいろ今まで知らなかった事を申し訳ないと思うと同時にこれからいろいろ知りたいと強く思う」「映画という媒体は状況の呑み込みにズシっとくるのがいい。同じアジアの青年たちの苦しみ切なさ、青

春の輝き、よかった」「ドキュメンタリーを通してリアルに生活している人の考えに触れる事ができている
いと考えさせられた」などがあった。

ナルコティクス アノニマス・オープンミーティング

主 催：ナルコティクス アノニマス日本

日 時：2017年11月25日(土)13:00-15:00

会 場：中野区産業振興センター 大会議室

参加者：58名

薬物の問題で苦しんでいる方や、その家族・友人はもちろん、関心をお持ちの方であれば、どなたでもご
参加できるミーティングです。回復の道を歩む薬物依存症者の自助グループ「ナルコティクス アノニマス
(NA)」のメンバーたちが、薬物依存に関する個人の経験や思いを語りました。

長期療養時代のにじ色ライフプランニング入門

主 催：特定非営利活動法人パープル・ハンズ

日 時：2017年11月25日(土)13:00-15:00

会 場：中野区産業振興センター セミナールーム1

参加者：29名

パープル・ハンズは、性的マイノリティの老後を考え、つながる NPO。単身者や法に規定のない同性カッ
プルの〈暮らし・お金・老後〉をテーマに講座、相談、カフェなどに取り組んでいます。

この勉強会は、一般に乏しい性的マイノリティ向けに編集しなおされたライフプラン情報（老病死の場
面に備える法制度等の情報）を紹介するとともに、長期延命できるようになった HIV 陽性者にも、同様の視
点から役立つ「老後」情報を提供する機会とすることを目的として開催しました。

当会で定期的に行っている性的マイノリティ版のライフプランと法制度に関する講座の内容を、一回に
ダイジェストして講演。とくに AIDS 関連イベントということもあり、長期延命できるようになった HIV
陽性者にも、「老後」を考える必要がある視点から、陽性であることもあたりまえに織り込んだ内容で構成
しました。

老後を避けがちになる当事者傾向ながら（本当は多くの方が不安や関心をもっているのですが）、熱心な聴
講者に聞いていただきました。

聴講者のなかには、後日、当会へ直接相談に来られる陽性者もおり（講座の内容が堅実・適切で信頼でき
たから、と）、会の活動へ興味・参加を表明する人もいました。

発表者：永易至文（パープル・ハンズ事務局長、行政書士、FP 技能士）

ヨーロッパの CM から性表現を考える

日 時：2017 年 11 月 25 日(土)13:00-15:00

会 場：中野区産業振興センター セミナールーム 2

参加者：34 名

ヨーロッパのコンドームやバイアグラの CM では、セックス礼賛表現が溢れ、HIV の啓発動画でも「露骨」なセックス表現が見られます。児童ポルノや暴力表現には厳しい国が多いですが、同時に日本では欠落している部分があることを見据えるべきでしょう。もっと性の表現を。

出演：松沢呉一（フリーライター）、ハスラー・アキラ（クリエイター）、On Lee（NPO 法人東京レインボープライド理事）

『PrEP 17』上映会～HIV の新しい予防方法、PrEP を学ぼう！

主 催：カラフル@はーと

日 時：2017 年 11 月 25 日(土)15:30-17:30

会 場：中野区産業振興センター 多目的ホール

参加者：80 名

「カラフル@はーと」は LGBT 当事者で精神疾患、発達障害、依存症（アルコール・薬物・性行動、他）などの問題を抱える方のための、自助グループ。

イギリスのドキュメンタリー映画「PrEP 17 - The coming of age of PrEP」の上映、海外の PrEP 事情に詳しい山口医師を迎えてのトークと質疑応答を実施した。来場者アンケートや質疑応答の内容から考えると、PrEP について全く知らないという人よりも、既にどこかで見聞きしていて関心のある人たちが多く参加した様子。踏み込んだ内容の質問も多く出て、質疑応答はなるべく多く回答するよう努めた。PrEP について知らないという人はまだまだ多いはずなので、今後も細々と周知活動をしていきたいと決心した。上映会后、PrEP 反対派の人から直接苦情を言われたが、よい反応がそれに勝ったので、今回のイベントを開催してよかったと思った。

AV 男優が語る性感染症と幸せな SEX について

主 催：現役 AV 男優有志の会

日 時：2017 年 11 月 25 日(土)15:30-17:30

会 場：中野区産業振興センター 大会議室

参加者：69 名

こうした啓発イベントには、2017 年度 2 回目の参加になりました。現役 AV 男優の吉村卓、野島誠、森林原人の 3 人が参加して『今の AV 業界での性感染症への予防や対策について』や『AV 男優が話す性感染症について』や『男優だからこそ感じる幸せな SEX とは？』などについて多くの皆様の前で話しました。来場者の方々はとても好意的で真剣に話を聞いてくださいました。また、意外にも男優が性感染症の知識がある事にびっくりした方もいました。

今後も、男優という仕事から得た知識や経験を若い方たちに伝えたり、またアダルトビデオはファンタジーで正しいSEXではない！という事を引き続きアナウンスしたりして行きたいと思いました。

エイズ対策講演会

主催：中野区保健所

日時：2017年11月25日(土)15:30-17:30

会場：中野区産業振興センター セミナールーム2

参加者：28名

「長期治療による高齢化を背景として地域の中でエイズ患者を診る事」と題して、国立国際医療研究センター/エイズ治療・研究開発センター臨床研究開発部長の菊池嘉先生にご講演いただきました。

講演内容は、世界三大感染症のひとつである HIV/エイズの基礎知識から始まり、HIVに感染してからエイズを発症するまでの経過など、一般区民の方にも理解しやすい内容でした。「治療法の進歩により、HIVに感染していても、エイズを発症することなく非 HIV 感染者と同様に社会生活を送ることが可能となっている。それゆえ HIV 感染者が高齢化している現状がある。HIV 感染者はエイズ以外の疾患の発症率が高いことにも注意が必要で、治療継続支援のポイントは個別のライフスタイルにうまく服薬を組み込み、治療と生活の両立を目指すことだ。」といった趣旨でお話いただきました。来場者は熱心に耳を傾けられており、時にユーモアを交えながらの先生のご講演はとても充実した内容で、あっという間の時間でした。ご講演の最後に、「地域で HIV 感染者を診る時代を迎えつつある」と締めくくられました。

『ALTERNATE ENDINGS』 & 『やめられない習慣』 上映会

主催：normal screen

日時：2017年11月26日(日)10:00-11:40

会場：中野区産業振興センター 多目的ホール

参加者：15名

Visual AIDS による短編映像集。全米 50 か所以上で上映された現代アーティスト 7 組による作品集と映像を通し、HIV/AIDS の影響を共有するアメリカの 9 組を紹介する作品を同時上映。ACT UP の活動から YouTuber まで題材は幅広い。

日曜の朝 10 時開始だったこともあり、来場者は少なかった。しかし学生の姿もあり、感想には「貴重なビデオからたくさんメッセージを受け取ることができた。自分でも情報収集して大学での学びや活動に活かしたい」「もっといろんな場所で上映してほしい。みんな見るべきだと思う。必ず何か伝わると思う」などがあった。

トーク出演：秋田祥 (Normal Screen)

監督：トム・ケイリンほか

HIV/AIDS 診療現場における薬物使用者のプライマリケア

日時：2017年11月26日(日)10:00-12:00

会場：中野区産業振興センター 大会議室

参加者：22名

HIV/AIDS 診療現場で求められている薬物使用者のプライマリケアを考える学習会として開催した。

HIV に感染している人の中で、薬物使用の経験者が少なからずいることは多くの調査で明らかになっている。しかし、発表者も、診療している患者さんから薬物使用をカミングアウトされても、HIV/AIDS 診療現場で薬物を使用している人に対するケアを提供するという発想がないまま、患者さんが再逮捕されるという状況が繰り返されていた。

転機となったケースは、刑務所からの出所後、自ら社会更生施設に入ることを主治医に連絡してきた、ある患者だった。施設が遠方だったことから、施設に近い HIV 診療拠点病院に紹介。しかし、しばらくして薬物の再使用で再逮捕されたとの連絡が本人から入った。

そんな時に松本俊彦先生の「よくわかる SMARPP」に出会い、依存者支援の基本を学んだ。

★失敗した（薬物を使った）ことが正直に言える場所 ★苦痛を緩和するための依存症

★当事者、援助者同士の「つながり」の促進 ★薬物使用発覚は治療を深める絶好の機会

★依存者に見られる援助希求性の乏しさ ★援助者は当事者に学ぶ姿勢を

日本では、薬物使用を個人の問題ととらえ、「ダメ絶対運動」が展開されている。しかし、公衆衛生、健康づくりの分野でハイリスクアプローチ、ハイリスク者への指導だけで成功した分野はない。ポピュレーションアプローチ、すなわち、根本原因、社会に蔓延するリスクへの取り組みが求められている。ソーシャルキャピタルが醸成された、「つながり」、「お互い様」、「信頼」の三要素が揃っている環境では人は健康的な行動をとり、自殺率も低下する。薬物使用者、薬物依存者の支援の基本も、その人を取り巻く「つながり」、「絆（きずな+ほだし）」、「居場所」をどう構築するかが求められており、それが構築できないと使用者は再使用を繰り返し、結果として依存症患者になると考えた。

厚木市立病院では HIV/AIDS 診療チームが、様々な職種が集まった集団としてだけではなく、精神科医の適切な指示を受けながら、個々人が、薬物使用者との相性も考慮しながら、患者やその家族とつながり続ける体制を作り上げつつある状況を報告した。

出演：岩室紳也（厚木市立病院 泌尿器科）

ゆるふわ性教育

主催：特定非営利活動法人ぶれいす東京

日時：2017年11月26日(日)10:00-12:00

会場：中野区産業振興センター セミナールーム2

参加者：33名

ぶれいす東京は1994年に設立し、HIV陽性者とその周囲の人の支援、予防啓発、研究・研修や情報発信などを地域に根ざした形で行っている団体です。

「性ってなんだろう——」。11月26日(日)朝から行われた本イベントは、来場者の3割強が教職員とい

う中で、オープンリー・ゲイの小学校教諭の鈴木茂義さんと、長年セクソロジストとして性の健康について取り組んできた池上千寿子（ぷれいす東京前代表、現理事）によるトークショー形式で始まりました。二人からはそれぞれが子ども時代に受けた性教育について感じたことと、やがて性教育を実践する立場となってから考えたことや経験などが語られました。「昨年、ゲイであることをオープンにして以来、性を自分ごととしてとらえるようになった」という鈴木さんからは、生徒たちと楽しく正直にコミュニケーションを取るさまざまな工夫を紹介してもらいました。

後半は来場者との Q&A セッションが行われ、年々、性に関する情報は手に入りやすくなっている一方で、社会の中で性について語ることの困難さは変わらないといった課題も指摘されました。大人たちが嫌々性教育をやっていると、そんな性への態度や価値観は子どもたちへも伝わります。池上理事からは、方法論ばかりではなく、まずは性に対するさまざまな思いこみから自分たち自身を解放して楽になっていいのだという、「ゆるふわ性教育」に込められたメッセージが伝えられました。

来場者アンケートからは、「肩の力が抜けてほっとする時間をもてた」「性教育について、大人が安心して語れる場があることもとても大切」といった感想が寄せられました。

また、当日は NHKE テレの取材を受け、11月30日（木）放送の「#ジューダイ 生放送でお悩み相談 ツイッター連動▽ジューダイの性のリアルな悩み」の中でイベントの様子が紹介されました。

「性教育」というと大ごとのようにとらえたり、肩肘張って考えたりしがちかもしれません。しかし、日常のコミュニケーションの中でゆるりとふわりとやれることもある、といった気づきを共有する機会となりました。

『トークバック 沈黙を破る女たち』上映会

日時：2017年11月26日(日)12:40-15:00

会場：中野区産業振興センター 多目的ホール

参加者：42名

元受刑者と HIV/AIDS 陽性者の女性たちが、自分たちの人生を芝居にした作品。暴力にさらされ、“どん底”を生き抜いてきた彼女たちの舞台は芸術か、治療か、それとも革命か？ 芝居を通して自分に向き合い、社会に挑戦する8人の女たちが声を取り戻していく。

トーク出演：坂上香（監督）、佐藤 郁夫（ぷれいす東京）

上映後には、監督の坂上香さんとぷれいす東京の佐藤郁夫さんに“トークバックセッション”を行っていただいた。坂上さんから映画の背景などが説明され、佐藤さんは HIV 陽性になってからの自身の経験を共有してくださった。アンケートには「会場で初めて HIV 陽性の人たちを見た。もっと陽性者のことを知りたいと思った」「人との繋がりではここまで変われるのかと、まじまじと見せられた。自分の中に答えがあることを知りました」といったコメントがあり、勇気付けられた女性はもちろん、現在の日本では話題になることの少ない HIV とともに生きる女性や、過去の傷や社会からの偏見に負けずと生きる登場人物に刺激をもらった男性の観客も多かったようだ。

MSM コミュニティへのアプローチ ～日本とアジア～

日時：2017年11月26日(日)13:00-15:00

会場：中野区産業振興センター 大会議室

参加者：43名

[目的] タイ、台湾、中国などアジア地域では、MSM において HIV 感染が広がっており、コミュニティに向けた取組みが求められている。MSM コミュニティへのアプローチは、モンゴル国のようにゲイ向け商業施設が無い地域もあり、国や地域の状況に応じた取組みが必要である。エイズ学会学術集会・総会を機に海外から来日するスピーカーを交え、MSM コミュニティへの取組み、HIV 陽性者への支援環境の情報を共有した。

[実施内容] 司会進行を金子典代、高久道子（名古屋市立大学看護学部）、市川誠一（人間環境大学看護学部）が担当した。プログラムの概要を以下に示した。

1. 日本における MSM コミュニティへのアプローチ

発表者：岩橋恒太/NPO 法人 akta

日本では、近年およそ 1400 人の HIV/AIDS が報告されている。2014 年は日本国籍 HIV 感染者の 74%、AIDS 患者の 59%が MSM であった。厚生省 MSM 研究班によれば、MSM 人口割合は 4.6%で、出生年代別 HIV 報告数の年次推移は若い MSM で増加している。また近年の特徴として外国籍 MSM の HIV 感染者が増加傾向にある。日本人 MSM の外国籍 MSM との性経験率は 20%であったことから、外国籍 MSM への予防啓発も必要になっている。東京はアジア最大のゲイタウンを抱えていることから、国内外からの来訪者が多い特性があり、国内に加えアジアからの来訪者への取組みも求められている。

2. 日本における MSM コミュニティへのアプローチ～若年層への取組み

発表者：塩野徳史/大阪青山大学健康科学部/MASH 大阪

日本の MSM における HIV/AIDS は 2010 年ごろから横ばいとなったが、減少に転じていない。大都市のある都府県では横ばいや減少が見られているが、他の地域では AIDS 患者の増加が見られ、MSM での HIV 感染は全国的な広がりとなっている。こうした状況に対して、全国の CBO やコミュニティセンターは協働した取組みを開始している。また、若年層 MSM へのアプローチとして「やる！プロジェクト」が大阪を軸に他地域と共に展開された。大阪地域の調査では、若年層 MSM で HIV 検査受検行動とコンドーム使用行動が向上していた。PrEP を含め色々な取組みが言われる今日であるが、MSM コミュニティへのセクシュアルヘルスプロモーションを軸にした取組みは今後も重要な基盤である。

3. モンゴルにおける MSM コミュニティへのアプローチ（逐語通訳）

発表者：Myagmardorj Dorjgotov, Nyampurev Galsanjamts/ MSM & TG Community Center,
Mongolia

人口およそ 300 万人のモンゴルでは、累計 349 人の HIV/AIDS が報告されているが、サーベイランス体制が十分でないため正確な状況は不明である。HIV/AIDS の大半は男性で、その 79.2%は MSM である。日本とは異なり MSM が利用できる商業施設等がないため、MSM に資材や情報を普及させることも容易でない。こうした背景に対して、モンゴル NGOs は、MSM 層へのアウトリーチ活動を市街やオンラインで展開し、啓発活動を行いつつ HIV や他の性感染症検査を提供している。モンゴルでは同性愛や AIDS に対する差別は依然として存在しており、NGOs は日本の”Living Together”をモデルにした “We are living

under the same sky (LUSS)”を 2011 年から継続して展開している。

4. アジア地域の MSM における HIV/AIDS の現状と課題（逐語通訳）

発表者：Midnight Poonkasetwattana / APCOM, Thailand

アジア地域では MSM において HIV 感染が拡大している。そのため HIV の予防啓発については、MSM コミュニティにターゲットをあてることが大変重要である。都市部で HIV 感染率が高いこと、若い MSM でコンドーム使用が低いため取組みが重要であること、予防啓発へのアクセスが低いこと、MSM への対策予算が限られていること、これらのことはどの国でも共通している。MSM の地域間移動を考えても、アジアの国や地域で、コミュニティ間の連携をとって活動していくことは重要である。

HIV 拡大が始まって 30 年たっても、アジア地域では MSM への予防啓発が十分でないといった課題がある。私たちは強い意志でこの問題に取り組み続けなければならない。ICAAP（アジア・太平洋エイズ国際会議）でも、私たちが立ち上がり、ゲイコミュニティにとってセクシュアルヘルスの課題が重要であることを連携して声を上げ続ける必要がある。私たちはコミュニティチャンピオン（リーダー）として声を上げていく覚悟が必要である。

[参加者との意見交換] 途中からの参加や退出があったが、30 名をこえる参加者があった。モンゴルの HIV 陽性者の治療については、「治療費は政府が負担し、治療は NCCD（国立病院）で受けられるが、他の医療機関では医療従事者の知識の不足や患者への差別がある」ことが紹介された。また、「以前の ICAAP では、MSM の声を上げる活動が目に見えて力強く存在していた感じがあったが、近年減ってきているように感じる。これは大変残念なこと。国際会議の場でも HIV 予防啓発、支援において MSM の声が重要となるよう声を上げ続けていくことが必要である」とのコメントが参加者からあった。このほか、「予防啓発におけるオンラインを使ったイノベーションとは具体的にはどのような活動か?」といった質問があった。Midnight さんは、「若い MSM は必ずしも商業施設に来るわけではないため彼らに適した介入方法を考えていく必要がある。その点でもオンラインイノベーションは大変重要」と話していた。

[会を終えて] Tokyo AIDS Weeks 2017 の場を借りて、総会に続きアジアの MSM における HIV をテーマに意見交換ができた。参加者のアンケート回答には、モンゴルの MSM における HIV 感染や HIV 陽性者への偏見・差別が深刻な状況にあることを知った、アジア地域の MSM への HIV 感染対策を進めるために CBO や MSM コミュニティのネットワーク構築とその協働による力強いアプローチが必要であるなどが述べられていた。また、他の国の状況を初めて知った、海外の状況を知る機会は今後とも必要とのコメントもあり、回答者の 85%が有意義であったとのことであった。

医療とユニバーサルデザイン ～HIV 感染症を例として～

主催：中野 LGBT ネットワークにじいろ

日時：2017 年 11 月 26 日(日)13:00-15:00

会場：中野区産業振興センター セミナールーム 2

参加者：28 名

当団体は、主に中野区において、LGBT 理解を図るための啓蒙および活動を行っている。

このイベントは、中野区においてユニバーサルデザイン条例が話し合われているなか、HIV 陽性者および LGBT の当事者による暮らしや医療現場での体験談を聞くことで、誰もが安心して生活できる社会につい

て考えることを目的として、以下のテーマをもとに講演およびディスカッションを実施した。

1.中野区におけるユニバーサルデザイン条例の現状について

2.LGBT 当事者の医療現場での現状と課題

3.HIV 陽性者の医療現場での現状と課題、また感染後の暮らしについて

出演：長谷川博史（NPO 法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス前代表）、内藤忍（独立行政法人労働政策研究・研修機構 労使関係部門副主任研究員）、永易至文（NPO 法人パープルハンズ代表）、渋谷昌信（中野共立病院 医療社会室ソーシャルワーカー）

実際に医療現場で働く方々の参加も多く、そういった方々から「あらためて医療現場での課題や知識のブラッシュアップについて意識できた」との感想をいただいた。また、北海道の先進的な取り組みも参加者の方から情報をいただくことができた。

会の後半では、まだまだ偏見や差別もあるなかで、今後どのようにこの問題に取り組んでいくべきかといったことを、当事者だけでなく医療従事者の方々も含めて熱い意見交換や情報交換がなされたことも印象的だった。

『売買ボーイズ』上映会&トーク

日時：2017年11月26日(日)15:30-17:30

会場：中野区産業振興センター 多目的ホール

参加者：150名

セックスワークに従事する男の子たちへのインタビューによって構成された映画の上映とトークセッションを通して、彼らの職務内容や生活状況、彼らの体験と性病との関連などを一緒に考えることを目的として実施しました。

出演：イアン・トーマス・アッシュ（プロデューサー）、コウ（出演者）、岩橋恒太（NPO 法人 akta）

本作の上映が TOKYO AIDS WEEKS で行われたことによって、我々の目的の一つである「性病」について、より深く考えるきっかけになったのではないのでしょうか。時間制限もあり、上映後の質疑応答では会場から二つの質問しか受けることが出来ませんでした。皆様にご記入頂いたアンケートにて、沢山の感想を頂きました。それらをいくつかピックアップさせて頂きました。

- ・ ウリ専にまつわる問題が想像以上に多角度に「深い」ということが最もアップデートされた内容だった。性病の知識の業界における薄さ（もっと徹底されていると思っていた）のみならず、労働問題や社会支援の問題とも密接な関連があるというところが新鮮だった。
- ・ ゲイ、ノンケに関係なく社会全体的に教育が必要と思いました。
- ・ 知らない世界を知れてよかった。見方が変わった。当たり前ですが、普通の人間なんだなって思いました。
- ・ 性についてあまりに閉鎖的な日本なので、少しずつこういった映画などから興味を持って、自ずから勉強していくことが大切と感じました。子供たちにも伝えたいです。ありがとうございました。
- ・ とても有意義なイベントでした。しかも上映が無料とは驚きました。
- ・ ゲイ向けの内容に関して、ノンケの人達がどういう感想を持っているのか知りたい。上映後のトークでもゲイが自分たちのカルチャーについての話に終始していたので、この内容の映画がノンケにはど

う受け入れられるのか、そういう話が聞きたかった。

また同時に、今回の TOKYO AIDS WEEKS に参加させて頂いたことで多くの知見を得られました。この経験を次の活動へ活かして行きたいと思います。

日本の HIV/AIDS の「いま」を知る！ ～HIV 陽性のためのアンケート調査・結果報告会～

主 催：HIV Futures Japan プロジェクト、NPO 法人日本 HIV 陽性者ネットワーク・ジャンププラス

日 時：2017 年 11 月 26 日(日)15:30-17:30

会 場：中野区産業振興センター 大会議室

参加者：40 名

HIV Futures Japan は、おもに HIV 陽性者を対象としたアンケート調査や、HIV 陽性者のためのポータルサイト運営を行っています。またジャンププラスは、HIV 陽性者による交流の場づくりや、当事者の立場からの情報発信、人権擁護に関する活動を行っています。

HIV Futures Japan プロジェクトが 2016 年 12 月～2017 年 7 月にかけて実施した、HIV 陽性者を対象としたアンケート「第 2 回 HIV 陽性者のためのウェブ調査」（回答者数 1,110 名）の結果について報告を行いました。調査終了から間もない時期であり、おもに単純集計のフィードバックが中心となりましたが、本邦初公開となる報告会を TOKYO AIDS WEEKS 2017 で開催させていただくことができました。

アンケート結果からは、HIV 陽性者が抱える様々な課題やニーズが明らかになっています。特に印象深かったのは、HIV 陽性であることをパートナーや周囲の人に伝えていると回答した人の割合が全体的に減少していることでした。実際に伝えたことによるデメリットや、伝える必要がないのでは？といった語りも自由記述も散見され、HIV 陽性者の姿が見えづらい、声が届けられないという課題は今後も続くだろうと思われました。また健康面では、HIV 感染症のために定期受診をしている一方で、がん検診の割合が相当低いことが明らかとなりました。健康維持に関するリテラシーや情報、医療者とのコミュニケーションにも課題がありそうです。JaNP+が定期刊行しているニュースレターにおいても、こうした話題を入れていく必要があると感じました。

当日は、フロアからも様々な意見や質問があり、特にヘテロセクシャルの男性・女性やトランスジェンダーの回答が少なく、今後調査を行う上での課題であるという認識を共有しました。

ケニアの LGBTI 難民の現状について

主 催：虹ともアフリカ

日 時：2017 年 11 月 26 日(日)15:30-17:30

会 場：中野区産業振興センター セミナールーム 2

参加者：13 名

虹ともアフリカは、同性愛が犯罪とされるアフリカ諸国の当事者支援を主に、カクマ難民キャンプの LGBTI 難民を支援しています。

このイベントは、将来的に日本も LGBTI 難民を受け入れる土壌を作る啓蒙活動の一環として実施しました。スクリーン、プロジェクターを使って 100 枚近いスライド（難民キャンプの LGBTI の生活がわかる

写真が中心) を使って説明しました。

来場者の皆さんは、とてもよく聞いてくださいました。真剣な質問もいただき、興味がある方がいらっしゃることを実感しました。ナイロビの都市部難民(ゲイの団体)の手芸品(バッグ、ポーチ)も買って頂きました。本当にご来場ありがとうございました。売上は、その団体に支援金として送付させていただきました。

写真展『OUT IN JAPAN』

主 催：認定特定非営利活動法人グッド・エイジング・エールズ

日 時：2017年11月25日(土)～26日(日)

会 場：中野区産業振興センター 展示コーナー

来場者：150名

LGBT等の当事者をレスリー・キーが撮影した写真展を、TOKYO AIDS WEEKS 2017 会場内で開催しました。

Gay Men's Chorus

日 時：2017年11月25日(土)16:00-17:00

会 場：コングレスクエア中野(第31回日本エイズ学会会場) B1F ホワイエ

来場者：200名

TOKYO AIDS WEEKS 2017 と同時開催された第31回日本エイズ学会学術集会には、全国から千名以上の専門家らが参加しました。TOKYO AIDS WEEKS 2017 実行委員会では、同学会の会場内での合唱に参加するゲイ男性を募集。当日は以下の楽曲を披露しました。

曲目：Climb Ev' ry Mountain (『サウンド・オブ・ミュージック』より)

Woman “Wの悲劇より”(薬師丸ひろ子)

ひまわりの約束(秦基博)

POP STAR(平井堅)

春に(作詞：谷川俊太郎/作曲：木下牧子)

上を向いて歩こう(坂本九)

指揮：なおき/ピアノ：ペーすけ